神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# カルメン・マルティン・ガイテと言葉



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2012-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Nakamachi, Chiho<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/998 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

## ２．博士論文審査の要旨

本論文は,20 世紀スペイン文学を代表する作家 カルメン･マルティン･ガイテ(Carmen Martín Gaite, 1925-2000）の諸作品を「言葉（palabra)」という共通項で読み解こうとする研究である。　マルティン・ガイテは現代文学における大きな存在でありながら，我が国では研究が十分とは言えず，邦訳も『マンハッタンの赤ずきんちゃん（*Caperucita en Manhattan*)』(原作 1990，鈴木千春訳 1993）のみにとどまっている。　その中にあって，本論文は代表作を包括的に扱い，詳細に考察した，恐らく我が国で初めての研究であり，その点で大きな意義を持つと言える。

本論文は，第１章「生涯と作品」で対象についての概要を述べたあと，５つの章を設けてマルティン・ガイテの代表作を発表年代に従って配列し，論じていく。　１つの章で１つの作品を扱うが，第３章には，比較的短編の３つの作品がまとめられている。　全ての作品が「言葉」と深く関連していることを論じ，「むすび」の章でそれを総合的に捉えなおした結果，マルティン・ガイテにとって言葉とは，「生きている限りともに歩み続ける同志」「決して離れることのない人生の伴侶」であったという結論に至る。

論文の構成は均整がとれており，論旨，結論は極めて明快である。　そして学位申請者が主張するとおり，「言葉」がマルティン・ガイテの作品を理解する上での重要なキーワードの１つであることは疑いないであろう。

作者自身が「『長話』は言葉への賛歌にほかならない（*Retahílas* no es otra cosa que un canto a la palabra.)」のような発言をしているので，本論文の主張はそれを発展させたに過ぎないと言えるかもしれない。　だが「言葉」という単一の共通項に全作品を収束させる主張は従来行なわれていなかったようであり，慧眼として評価できよう。

しかしながら明快な結論には，ややもすると実態を過度に単純化して捉えるという危険がつきまとう。

第１に，「思いを言葉で表すことによって得られる癒し」を主題にする『長話（*Retahílas*)』(1974）や『晴れたり曇ったり（*Nubosidad variable*)』(1992）などにとっては，本論文の主張は有効であるが，『雪の女王（*La Reina de las Nieves*)』(1994）は，言葉の効果もさることながら，記憶，郷愁そのものが主題と言えるのではないだろうか。あるいはマルティン・ガイテが「言葉なしでも理解しあえる」状態を最善と考えていた可能性はないだろうか。

第２に，マルティン・ガイテの作品は「個人と集団との関係（relaciones entre individuo y colectividad)」を示そうとしている，あるいは「女性登場人物の追憶（recuerdos de personajes femeninos)」を主に描いている，と評されることがある。　こういった他の視点からの主張のほうが作品のより良い理解につながりはしないだろうか。

このような対立案との優劣を比較しつつ，本論文の主張を導いていけば，説得力が増したであろう。　本論文の議論は，「ある視点から作品群を見ればこのようになる」という提案を重ねていく形をとっているが，それを他の視点と戦わせて鍛えあげていく過程が不足している。

また本論文は，マルティン・ガイテとその作品群に寄り添おうとする真摯な態度に貫かれた，良い意味での印象批評であるが，「言葉の癒しの力」や「明るく，救われる読後感」を肯定的に取り上げる一方，やや批判的視点に乏しいように思われる。　たとえば，マルティン・ガイテの言う「言葉による癒し」とは，悩みを持つ者が一方的に語り続け，あるいは書き続けることによって得られる場合が多い。　これは言葉の本来の姿である双方向の意思伝達とは異質の状態であるが，その違和感をどう説明するのかなどにも触れるべきであった。

**論文審査結果**

第１章「生涯と作品」は，序論としてよくまとまっている。欲を言えば，本論文の対象外となった 1974 年以前の作品（*Entre visillos*, 1958, *Ritmo lento*, 1963 など）と 1995 年以降の作品（*Irse de casa*, 1998, 没後出版された *El libro de la fiebre*, 2007 など）についてのより詳しい紹介が欲しかった。

第２章「言葉への賛歌」では『長話』は「言葉の持つ癒しの力」を示した作品だとする。

既に修士論文で扱った問題であり，この章の議論は十分練られているが，問題点が散見される。

第１に，「言葉による癒し」は読者だけでなく，作者自身にも向かっている。　これは当然のこととして触れられていないが，やはり「癒し」のベクトルが読者のみならず作者にも向けられている点はマルティン・ガイテの創作態度および作品世界の読解とも密接に関わることからも、一言断っておく必要があるだろう。

第２に，この章では，マルティン・ガイテは「文学作品は限られた読み手に対して特殊な知識を要求するようなものでは決してなく，誰に対しても同じく開かれた可能性への扉のようなものでなければならない」(p. 8) と考えていたというが，実際には『生きることの不思議（*Lo raro es vivir*)』(1995) のように他の文学作品からの引用に満ちていて，「誰にでも読める」とは言えない作品も著している。　この矛盾をどう考えるのかについて，どこかに言及があることが望ましい。

第３に，この章の第 12 節「話し言葉による瞬時の癒し」の議論から，マルティン・ガイテはテクストへの読者の積極的参加をうながし，「言葉による癒し」の受け手としてのみ存在するのではない読者の独自の解釈を歓迎しているのではないかという問題提起が可能である。今後，この点の考察も進めて欲しい。

第３章「言葉と文学」では『奥の部屋（*El cuarto de atrás*)』(1978)，『果てしない物語』（*El cuento de nunca acabar*) (1983)，『マンハッタンの赤ずきんちゃん』の３作品に，作者の「言葉へのこだわり」があると説く。『マンハッタンの赤ずきんちゃん』は小品で，かつ児童向けという理由で，単独の章を立てず、このような扱いになっているが，作者の愛娘への思いがこめられ，また『晴れたり曇ったり』への橋渡し的作品として重要な位置を占めている。

また児童向けであるがゆえ，かえって作者の基本的主張が鮮やかに読みとれる面も否定でき

ない。　この作品は独立した章を設けるべきであったかも知れない。

また,1970 年代後半から 1980 年代にかけて童話･物語への回帰が流行した(Ana María Matute など)。　『マンハッタンの赤ずきんちゃん』はそのような文脈に位置づけて，問題を拡張すれば，興味深い議論が可能であろう。

なお，この章の p.28 以下では Adolfo Sotelo Vázquez の説が多く引用され、それがマルティン・ガイテ自身の考えであるかのように論展開されているが，引用部分とマルティン・ガイテの創作世界に関する申請者の主張との境界が不分明である。

第４章「言葉とともに生きる」では,『晴れたり曇ったり』には,「言葉遊びの楽しさ」がこめられていると説く。言葉を「とらえようとすると夢のように逃げて行く蝶」のようなものとみなすマルティン・ガイテの言語観を丁寧に説明している。

なお，この章の p.51，p.54 などに「ユーモア」という術語が多用されている。「ユーモアの原動力」「マルティン・ガイテ特有のユーモア」のような記述も見られ，大切なキーワードの１つかと思えるにもかかわらず，その内容についての説明が不十分である。

第５章「言葉と記憶」では,『雪の女王』の基盤は,「言葉が記憶を呼び起こす」ことと，ロマン主義への作者の敬意の表れであると主張する。　総論で述べたように，言葉以外の要素も重要な働きをする作品であるが，本論文はあくまで，言葉を手がかりに論じている。

なお，この章ではもっぱらドイツ・ロマン派からの影響を扱っているが，それ以外の源泉（Benito Jerónimo Feijóo など）もたくさんある。今後の考察に期待したい。

第６章「言葉と世界」では,『生きることの不思議』は，パロディや引用，メタファーのような言葉の効力が十二分に生かされている作品だと見る。　セルバンテスに対する作者の敬意,間テクスト性の問題などを積み上げて，結論に至っている。

この章の p.126 では en este valle de lágrimas という句を含む原文が引用されている。

これは聖書，さらに『ラ・セレスティーナ』に登場する人口に膾炙した句であり，引用と隠喩がからまった，非常に興味深いくだりである。できれば稿を改めて，この問題を検討して欲しい。　また，この作品は，歴史学的記述が持つ不毛さという主題を扱っているとも捉えられるが，本論文中で「作家としてのスランプの克服」,「言葉を書くことによる癒し」に触れている以上は，それに対する言及がもっと必要であった。

以上述べたように、本論文は、なお改良の余地があるものの、一貫した基準によってマルティン・ガイテの諸作品を紹介・分析し，明快な結論に至った。　現代スペイン文学の研究に与えた貢献は決して小さくない。　従って、本学大学院博士論文として内容的にも、体裁としても申し分のないものであると判断できる。

**最終試験結果**

最終試験は 2012 年 2 月 13 日午後 1 時から、本学の三木記念会館で実施され、福嶌教隆（主査、司会進行)、野村竜仁、成田瑞穂の３名の本学教員と、柳原孝敦 東京外国語大学准教授が審査に当たった。　審査は公開でおこなわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後に、各審査委員が論文に対する意見、感想、質問を述べ、申請者が回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。　キーワードがなぜ「言語（lengua, lenguaje, idioma)」ではなく「言葉（palabra)」なのか，本論文が学界にどのような貢献を果たすのか、なぜ Galaxia Gutenberg 社版全集を使用しなかったのか，原文の引用の羅列という，文学の論文が陥り易い欠陥は克服できているか，などといった疑問や，和訳の適切さ，参考文献一覧などに見られる小さな誤謬などについて，厳しい指摘が数多くなされた。学位申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場からの積極的な質問・意見の機会を設けて公開審査は終了した。

公開審査後、４名の審査委員は別室で協議を行なった。　本論文はこの作家についての恐らく我が国で初めての総合的研究であること，邦訳もほとんどない状態で原作を十分に読み込んだ上で説得力のある論述を行ない、明快な結論を提示するに至っていることが評価された。

そして、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。